

27E-pm05

名古屋市立大学薬学部の製剤学実習における味覚センサー導入の試み～第6報～
福重 香¹, 竹内 堂朗¹, 瀧 萌子¹, 石亀 貴欣¹, 中谷 貴菜¹, 林 直美¹, 田上 辰秋¹, 阿部 憲太郎², 池崎 秀和², ○尾関 哲也¹ (1名市大院薬, 2インテリジェントセンサーテクノロジー)

名古屋市立大学薬学部では、2011年度より全国の薬学部に先駆けて製剤学実習に味覚センサーを用いた味覚の評価を導入し継続して実習を行ってきた。現在、味覚センサーは、味を客観的に評価できるツールとして、食品のみならず製薬企業においても広く用いられ、口腔内崩壊錠のように苦味マスキング技術が服薬コンプライアンスに大きな影響を与える製剤の開発に利用されている。我々は、口腔内崩壊錠の作成から、作成した錠剤の官能試験、崩壊試験等の機器による評価、そして味覚センサーによる味の評価を行い、一連の製剤開発を体験できると同時に製剤開発における味の重要性を認識できるような内容の実習を行ってきた。6年目となる本年度は、新たに服薬補助ゼリーの内容を追加した。服薬補助ゼリーは、薬の味やにおいをマスキングできるゼリー状の嚥下補助剤であり、薬の服用が苦手な小児・高齢者は、薬の服用を楽に行うことができる。味覚マスキング、服用補助効果についての体験学習、味覚センサーによる解析実習を行うことで、製剤開発や味覚について理解を深めることができると考えて実習を行った。毎年、実習終了後には本実習に関するアンケートを行っている。2016年度のアンケートは、履修者全員が興味をもって実習することができたと答え、ほぼすべての学生が本実習から味覚の評価、口腔内崩壊錠について理解することができたと回答した。加えて、製剤と味覚についての自由記述欄では、製剤設計および服薬コンプライアンスにおける味覚の重要性に関する高い理解を感じられる記述が多くみられた。特に本年の実習は、服薬補助ゼリーを用いた実習を加えることで、薬物治療における味覚の重要性を実際に体験し感じとる機会を提供でき、将来薬剤開発に関わる学生、薬剤師になる学生を問わず、すべての学生にとって有意義なものとなったと考えられた。